九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『私のアントニーア』に於けるジム・バーデンの「旅」

馬場, 佐和子

https://doi.org/10.15017/2332731

出版情報：文學研究. 72, pp.35-53, 1975-03-31. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

『私のアントニーア』に於ける ジム・バーデンの「旅」

馬　場　佐和子

1

ウィラ・キャザー (Willa Cather) によって1918年に著わされた長編『私のアントニーア (*My Ántonia*)』は，視点的人物として設定されたジム・バーデン (Jim Burden) が，彼の回想を通して，アントニーア・シメルダ (Ántonia Shimerda) という神話的ともいえる理想的女性像を描き出すという形式をとっている。アントニーアは，全編を通じて生々と鮮かに読者の前に提示されるのだが，ジムが，アントニーアの回想を綴った原稿のタイトルを，一度は *Ántonia* としながら後に *My Ántonia* と変更したのは何故であろうか。'My' という言葉を意図的に付加したところに，アントニーアという一人の理想的女性の生涯の物語という以上の意味を，この作品に付与しようとしたキャザーの意図を認めることができるのではないだろうか。この点を考察するにあたって，D. T. McFarland の次の言葉は示唆に富んでいる。

> The key to the structure, I think, lies in Jim's titling his story "My Ántonia". Though Ántonia is the center of the novel, her story is mediated through him. She remains the memorable character, but *her memorableness derives from what she means to Jim.* [1] [Italics mine]

1) D. T. McFarland, *Willa Cather* (Frederick Ungar Publishing Co., 1972), p. 40.

ジムにとってアントニーアは，子供時代の関心の焦点であり，「思い出の中の誰よりも，あの地方，その状態，そして子供の頃の冒険のすべてを意味するように思えた。」[2]このようなアントニーアを素材として，彼女の思い出を書き綴るという回想形式をとることにより，我々の前には，ジムの主観によって選択され，彼の視点によって限定されたアントニーア像が，彼との関連に於いてのみ提示されるのであり，ここに描出されているのは，ジムがいかにアントニーアと関わり，彼女をいかに意味づけ，価値づけたかということである。John H. Randall, Ⅲ の叙述にある如く，ジムを視点的人物として設定することにより，作者自身は序章以後 'a separate character' として姿を消し，以後，物語はアントニーアとジムの 'the parallel stories' となる。従ってこの作品は，アントニーアの物語というよりはむしろ，ジムとアントニーアの関係を描いた物語であるということが，作品のタイトルを *Ántonia* から *My Ántonia* に変更したことによって，明確化されるのである[3]。即ち，ネブラスカの大平原で送った子供時代へのノスタルジアと憧憬とが，子供時代の全存在であったアントニーアを理想的女性像として出現せしめたのであり，ジムは彼女を濾過紙として，喪われた過去を彷彿とさせられるのだ。

では，何故キャザーは，ジムをして喪われた過去を，それを象徴するアントニーアを，かくまで美化し理想化しようと意図したのだろうか。

曽てアメリカ大陸は，人間にとって夢と冒険と行動との格好の場であり，そこに存在した自然対人間の関係から，広大無比の自然に対する畏怖の念と遙かな憧憬とが喚起され，人々は森の大熊を怖れ，聳え立つ青い連峰を崇め，黄金の大草原に夢を燃やした。人々にとって自然は，生命を生み出す大いなる母であり，生きる術を伝授する人生の師であり，何よりもあらゆ

2) Willa Cather, *My Ántonia* (Hamish Hamilton, 1969), Introduction p. ii. 以下，文中のカッコ内の数字はすべてこの版のページ数を示す。翻訳は河出書房版「世界文学全集」第16巻・浜田政二郎氏訳を参照。

3) John H. Randall, Ⅲ, "Interpretation of *My Ántonia*," *Willa Cather and Her Critics*, ed. J. Schroeter (Cornell University Press, 1967), pp. 273—274 参照.

る生を司る神であったのであり，移民として欧州の文明をたづさえて新大陸に足を踏み入れた人々は，眼前に横たわる原始的自然に驚愕し，自然の狂暴さに翻弄され，又，時として自然の偉大な恩恵を手にして，繰り返し野性の洗礼を受けてきたのだ。しかし，広大な空間を目ざして「一団の人々が，いってみれば這い進む大きな一匹の獣」[4]となり，西へ西へと進んでいったフロンティアは，ゴールドラッシュによっていち早く太平洋岸に達し，19世紀末には，広大無比の果しなく続く処女地と思われた自由なる西部は，ほぼ完全に極め尽され，拡大し複雑化した文明社会にとって代られたのである。故に，未来への夢，個人の可能性を無限に発展させる社会への理想の喪失は，偉大なる自然への憧憬，いまだ文明の手に汚されていない原始への希求を高めた。そのような社会に在って，キャザーは眼を，生気に満ち，夢と冒険に溢れていた過去に向け，過去へのノスタルジアと，更には旧世界へのノスタルジアを，同時に又，夢の喪失によるフラストレーションの願望充足の型としてのアントニーアという理想的女性像を描出しようと試みたのである。このキャザーの意図を代弁すべく，ジムはアントニーアを媒介として，自己の喪れた子供時代を回想の中に現出せしめたのであり，ネブラスカ平原の子供時代に始まり，大地に深く不動の根を下ろし，種族の始祖としてその本性を発揮する「偉大なる母」となったアントニーアとの再会に終るこの物語は，荒野にかけた「アメリカの夢」という歴史性を内包したところの，きわめてアメリカ的な「神話」の物語である。

2

ジムの回想は，彼が10才の時，父と母を続けざまに失い，北アメリカ大陸の中部大平原を横切って，ネブラスカに住む祖父母のもとへ向かう汽車の旅から始まる。彼は雇い人ジェイクとともに，「新しい世界で運命を開拓しようと」（P．3）汽車に乗るのだが，ここに我々は，古典的「旅」のモ

4) John Steinbeck, "The Leader of the People," *The Long Valley* (The Viking Press, Inc., 1956), p. 302.

チーフを認めることができる。ヴァージニアの故郷を離れ,「新しい世界で運命を開拓しようと」辺境ネブラスカを目差す汽車は，夜，ブラック・ホーク（Black Hawk）の駅に着き，ジムはそこから又，夜道を馬車に揺られて，祖父母の待つ農場に向かうのだが，夜の闇の中を新たな生活の場へと向かい，大平原の自由な子供時代から，ブラック・ホークの町及び東部の大学町での生活，都会に於ける成功の後，再びネブラスカに戻るというパターンは，明らかに Joseph Campbell による，神話に於けるヒーローの旅の三つの段階 ——the departure, the initiation, the return——[5] にあてはめることができ，又，この「旅」を，C. G. Jung の言う所謂「夜の海の旅 (night sea journey)」と看做すことができる。
D. T. McFarland は次のように述べている。

> Thus, when he describes the red of the grass giving the prairie "the color of wine-stains", he evokes Homer's "wine-dark sea". This allusion suggests that Jim's journey is a kind of odyssey; the novel describes his adventures in his journey "home to [him]self", just as Homer signs of Odyssey's journey home to Penelope.[6]

ジムは，東部からネブラスカに帰還してアントニーアと再会した後，曽て少年の日の彼をこの地に運んだ道に立ち，次のように述懐する。

> *I had the sense of coming home to myself*, and of having found out what a little circle man's experience is. (pp. 371-372) [Italics

5) Joseph Campbell, *The Hero with a Thousand Faces*, quoted in J. Defalco, *The Hero in Hemingway's Short Stories* (University of Pittsburgh, 1968) p. 17.
"In the myth there are usually three dominant movements which are cyclic in pattern. They are the departure of the hero, the initiation, and the return from his heroic adventure."
6) McFarland, *op. cit.*, p. 41.

mine]

ジムの「旅」は,「本来の自分に帰っていく」ことを認識することによって終るのだが，この自己認識は，ひたすら土に取り組み，大地に深く不動の根を下ろしたアントニーアを,「そのかみの種族の始祖のように，豊かな生命を生み出す源」(P.353) として認識することによって達成されたものであり，神格化された女性の理想像としてジムの「旅」の終りに待ち受けるアントニーアは，幾多の試練を経た後，「夜の海の旅」から雄々しく甦るヒーローを待つ「偉大なる母」の像である。換言すれば，自己の拠って立つ原点を見極めるという自己認識・自己確認の「旅」は，アントニーアを理想的女性像と認識すること，即ち，「永遠の女性」――アニマ像探究の「旅」である。ジムは言う。「できることなら僕は君に恋人か，妻か，母かそれとも姉――なんだっていい，男にとっての女のなにかになってほしかったんだ。」(P.321) 更に,「私はその顔をこれからずっと心に刻みつけておこうと思った。私の記憶の奥底に，さまざまの女達の顔のすべての幻の下に，最も身近な，最も真実の顔として刻みつけておこうと思った。」(P.322) 丁度，オデュッセウスがペーネロペイアのもとへの帰還を願望した如く，ジムは，普遍的無意識に根ざしているアニマ像を，アントニーアの中に希求し続けるのである。Jung によれば，アニマの登場は，生物学的段階，ロマンチックな段階，霊的段階，叡知の段階の四段階の過程を経るのであるが，ジムの希求するアントニーアの姿も,「恋人か，妻か母かそれとも姉」という生物学的かつロマンチックな段階を経て，遂には「本能的に，普遍的であり，真実であることが認められる，太古以来変らない人間の姿勢」(P.353) を有し,「平凡な物事の中にひそむ深い意義を，それとなく現わすようなまなざしや身ぶりによって，それを見る人の息をはっと呑ませること」(P.353) のできる「そのかみの種族の始祖」として神格化される。このように，ジムの自己認識・自己確認は，アントニーアの中に一貫して「永遠の女性」――アニマ像を希求し続ける過程の中で達成され

るのである。

前述した如く，ジムの「旅」への 'departure' は，夜の闇の中をネブラスカの大平原を通って祖父の農場へ向かう道程に象徴されるのだが，この時ジムは，始めて接する大平原の異様さに圧倒され，それまでの自己を取り巻く世界から完全に離脱し，既成の価値規範に訣別して，'タブラ・ラサ (tabura rāsa)' の状態に戻って，新たな価値と理念を与えてくれる世界へ参入する。ここに，immaturity から maturity へ，innocence から experience へと進行するイニシエーションの旅のパターンが如実に現われている。

> There was nothing but land: not a country at all, but the material out of which countries are made....*I had the feeling that the world was left behind, that we had got over the edge of it, and were outside man's jurisdiction....* I had left even [my parents'] spirits behind me. The wagon jolted on, carrying me I knew not whither. I don't think I was homesick. If we never arrived anywhere, it did not matter.*Between that earth and that sky I felt erased, blotted out. I did not say my prayers that night: here, I felt, what would be would be.* (pp. 7-8) [Italics mine]

それまでの自己を取り巻く世界と訣別し，あらゆる経験を，自由に無限定に受容しうる姿勢を確立した上で，人生参入の「旅」へ出発しようとするのだが，ここには又，「偉大なる母」から変貌した「恐ろしい母」の胎内に呑みこまれる不安——自己消滅の恐怖と，逆に又，暗黒の中に吸いこまれ擦消されることへの一種の安堵感——母胎復帰願望が認められる。

ここで，同じく中西部の少年の人生参入の旅を描く，所謂「ニック・アダムズ物語 (Nick Adams Stories)」(by Ernest Hemingway)と比較する時，ジムとニックの間には顕著な相違が認められる。ニックは「インディアン部落 ("Indian Camp")」に於いて，自然の狂暴な意志と力と，そ

れに支配された無力な人間存在への開眼の衝撃から甦えり，「自分は決して死なない」との確信のもとに，新たな価値と理念を求めて旅立つのであり，更に「医者とその妻（“The Doctor and the Doctor's Wife”）」の終結部に於いて，自らの支配下に呼び戻そうとする母親 siren の呼び声を拒否し，父親の保護からも離れて，逆に自分が森への案内者となる。ここに認められる「旅」への積極性，父親・母親から分離した独立の存在としての自己認識，延いては自我意識の発生は，ジムにはまだ認められない。彼は自然に圧倒され，畏怖の念を抱く。彼は運ばれてきたのであり，この道は彼にとっての「宿命の道（the road of Destiny）」なのだ。故に以後，彼は自ら求めて行動しようとはしない。ただ目撃するだけである。

アントニーアも又，ボヘミアからの移民として「旅」を体験する。ジムの「旅」は，シメルダー家と同じ汽車に乗り合せたことにより，アントニーアの「旅」とパラレルを成すことになる。ジムが祖父母の保護のもとに，比較的恵まれた少年時代を送るのに比して，アントニーアはさまざまのハンディキャップを背負い，幾多の苦しい試練を経験しなければならない。ジムはそうしたアントニーアと身近に接することにより，自ら試練を体験するかわりに，彼女の試練を通して，自然の恣意と力を，同時に又，その豊饒な恵みを認知するのだ。実際に苦闘し耐え忍んでいくのはアントニーアであり，ジムはその結果を解釈し記録するだけである。しかもジムは，そうしたアントニーアの代体験を通じて，新たな自己の世界構築へと開眼し成長する，所謂 ‘round character’ であるのに対し，アントニーア自身は，数々の試練を受け留め，屈服することなく，常に不動の姿勢を保持し続ける ‘flat character’ であって，このようなアントニーアへの讃美と愛とに終始，慫慂されて，「旅」の終りの「本来の自分」への回帰，即ち，自己存在の原点たる「土」への認識を達成するのである。為めに，アントニーアは「旅」の初めから既に，ジムの自己認識達成のための代体験者として位置づけられ，故に，種々の試練を体験しなければならないし，又，それに屈服することなく，常に未来を志向し前進し続けなければならない

のである。この点について，John H. Randall, Ⅲ は次のように述べている。

> It is as if Ántonia actually lives life, while Jim merely records it, or at best lives vicariously through her. When he is with her, Jim is a complete personality and reaches his highest development as a human being, but his personal life falls apart when he leaves her, however successful he may be in his professional role. Later in the book when he returns to visit Nebraska after a twenty years' absence, he finds out just how far Ántonia has forged ahead of him during that time.[7]

両者の相違は，まずシメルダ家とバーデン家の相違として現われる。バーデン家が祖父母の長年の経験から体得された知恵によって，比較的豊かな生活を送っているのに対し，シメルダー家は，ボヘミアからの貧しい開拓移民であり，言葉の不自由，開拓生活の苛酷さへの認識不足，農耕に対する無知，大自然のもとでの生活への不適応，家庭内の不和，更には，唯一の友人の裏切り等々によって，荒野に対する勝ち目のない闘いを続けている。このような生活に適合しえない父親は，半年後の吹雪の日に悲劇的な自殺を遂げる。為めにアントニーアは，父親に代って一家の困窮を救うため，農場の肉体労働に従事し，後には町に出て雇われ女となり，結婚に失敗し，失意のうちに再び田舎に戻るのだが，一方ジムは，祖父母の庇護のもとに恵まれた少年時代を送り，教育を受け，大学入学のため，東部の大都会へ旅立つのである。ここには，秩序と混沌，文化的生活と原始的生活との対比があり，ジムの人生は上昇カーブを描いていくのに対し，アントニーアのそれはひたすら下降し続ける。アントニーア自身，ジムとの相違を認識しており，次のように述べる。

---

7) Randall, Ⅲ, *op. cit.*, pp. 274—275.

'If I live here, like you, that is different. Things will be easy for you. But they will be hard for us.' (p. 140)

ジムも又，シメルダ氏の自殺を契機として，両者の置かれた場の相違を現実に認識する。彼はシメルダ氏の死に，自然の恣意と力に適応しきれなかった人間の敗北の典型を見，その死を，「郷愁のためであり」（P.101）「あの人はただ，非常に不仕合せだったので，もうこれ以上，生きてはいけなかったのだ」（P.103）と理解し，「もしあの人が私達の家に住むことができていたら，こんな恐ろしいことは決して起らなかっただろう」（P.101）と考えた時，自然の苛酷さ，暴虐さと同時に，シメルダ家とバーデン家，延いてはアントニーアと自分との間の差を明確に認識するのだ。だがここで看過してはならないことは，ジムにとってシメルダ氏の死は，疲れ果てた彼の魂が祖国へ帰る旅立ちとして，比較的冷静に受けとめられるものであり，彼にとってより重要なことは，祖父母が出かけた後の家の中を，どのように立派に切り盛りするかということである。「自分がたった一人，家に取り残されているのに気がついた」（P.100）途端，彼は急に力を発揮し始める。

I felt a considerable extension of power and authority, and was anxious to acquit myself creditably.... After the cat had had his milk, I could think of nothing else to do, and I sat down to get warm. The quiet was delightful, and the ticking clock was the most pleasant of companions. (p. 100)

彼にとって，代体験者アントニーアにふりかかった苦難は，飽くまで間接的なものにとどまり，たった一人とり残されたと意識した時はじめて，保護者としての祖父母から分離した独立の存在としての自己を意識し，そこに自我意識が発生する。故に，自己実現の過程で与えられた自主性確立の機会を最大限に利用しようと試み，それを遂行しえたとき，自ら獲得した世界を満足気に見廻し，冒険に富んだ孤島のロビンソンの生活すら，色褪

せたものに感じられるのだ。

以上，述べた如く，シメルダ氏の死は，ジムの人生参入の一大契機として重要な意味を持つのだが，ここで更に注意を要することは，彼の死を通して，旧世界と新世界の対比が鮮かにクローズ・アップされることである。ここで再度，Randall の言葉を引用しよう。

> For Willa Cather as for many other nineteenth-century people Europe and America stood for pairs of opposites: Europe was tangibly the past, America tangibly the present; Europe stood for order, America for chaos. The two are connected, since the present is always visibly chaotic and needs to have order imposed upon it by applying the lessons learned in the past. The most important antithesis of all, however, was that America stood for nature whereas Europe represented civilization... in *My Ántonia* the vitality and the discipline of civilization are combined to form a new synthesis, which provides the basis for a settled agricultural society like that eulogized by Horace and Vergil.[8]

sensitive で，荒野に生きるための掟を持たず，新世界的なものに絶望して，ひたすら旧世界へのノスタルジアに駆られるシメルダ氏にとって，「平和と秩序ももう地上から消えてしまったか，それともはるかかなたに残してきた旧世界にのみ存在している」（P.86）としか思えず，平和も秩序も，旧世界とは全く異った価値と理念を創造し，かつ自己のものとして受容することによって獲得されることに思い至らない。彼の死をノスタルジア故の死と位置づけた時，ジムの心には，アントニーアから聞いた旧世界的なシメルダ氏の姿が，遙かに想起される。

シメルダ氏の埋葬にあたっては，道端の十字路に埋葬するという，古めかしい旧世界の慣習によって儀式が進められ，この事件によって，ジムに

8) *Ibid.*, pp. 316—317.

もアントニーアにも，旧世界的なものへの志向が芽ばえる。自己認識を達成するためには，遠い祖先にまで溯る自己の原点を認識しなければならない。シメルダ氏によって開かれた旧世界への道を通って自己存在の原点に触れ，彼の精神的遺産を通して，より高次の自己統合へと発展しようとする[9]。為めにその後ジムは，ことある毎にシメルダ氏を回想し，又，シメルダ氏の墓のそばを通るとき，次のように述懐するのである。

> I never came upon the place without emotion, and in all that country it was the spot most dear to me. I loved the dim superstition, the propitiatory intent, that had put the grave there; and still more I loved the spirit that could not carry out the sentence—the error from the surveyed lines, the clemency of the soft earth roads along which the home-coming wagons rattled after sunset. (p. 119)

アントニーアの中にも，父親と，彼から惹起される旧世界が生き続ける。新たな価値と理念によって構築された新世界は，しかしその底流に，旧世界的伝統，趣味，教養を保持しているのだ。F. J. Hoffman の言葉を借りるならば，

> "Some human pattern (some-classical form of order) must rise from *this union of Old World manner and New World necessity.* It was a problem of "scale"—how to order a vast, uninhibited geography in human terms; how to make the European virtue responsive to the mid-American challenge."[10] [Italics mine]

この新旧両世界の融合は，物語の最後，アントニーアとボヘミア農夫の結婚によって完成される。二人の家庭は多くの点でアメリカ風ではあるが，

9) シメルダ氏が生前，故国から持ってきた由緒ある古い銃をジムに贈る約束をしたことは，ジムを彼の精神的後継者とみなしていたと考えられ，興味深い。
10) F. J. Hoffman, *The 20's* (The Free Press, 1966), pp. 182—183.

家族間ではボヘミア語が話され，シメルダ氏が遺したヴァィオリンは，彼等の息子に受け継がれている。旧世界の伝統は原始的大地と融合し合って，生命と豊穣につながる新しい世界を実現させたのである。

祖父母と共にブラック・ホークの町に移り住んだジムは，少年時代から青年期へと参入する。ここで彼は，社会の複雑さ，不合理を目撃し，町の人々の意識に潜む差別意識を感知する。明るく牧歌的で，潑溂と生命の息吹きに燃える開拓移民の娘達は，町の青年の興味を集中し，讃美を引き起すにも拘らず，彼女達の出現が，町の社会秩序に対する一つの脅威と考えられる。町に蔓延っているのは，「ごまかしと虚構」であり，そこでは「一人一人の趣味，各々の自然な食欲も，警告によって掣肘を受けている」（P.219）のだ。

アントニーアを中心とする開拓移民の娘達は，数々の美徳——苛酷な労働で培われた勤勉さ，忍耐力，勇気，活力を具有し，潑溂とした美しさ，奔放さを発散させてジムを魅了する。ここに，牧歌的な生命の躍動の充満したひと夏が展開する。

アントニーアと彼女の友達等と共にジムが行ったピクニックに於いて，新大陸に無限の可能性を秘めた第二の楽園——"Kingdom of God" を建設することを目差した「アメリカの夢」の悲劇的結末が，「七つの黄金の都市」探究の途中，夢破れて「失意のうちに荒野に客死した」（P.244）コロナード（Coronado）に象徴されて喚起される。輝く新大陸に理想国を夢見た初期ピューリタン達の前には，広大な暗黒の荒野が横たわっており，彼等は苛酷な自然条件のもとで，厳しい苦闘を強いられつつ，これを切り開いて進まねばならなかった。同様にコロナードも又，夢と冒険とロマンスに駆りたてられて新大陸に足を踏み入れ，荒野の厳しい現実に触れて，夢破れるのである。Randall の叙述を借りると：

Coronado stands for the spirit of adventure and romance, and the kind of life young people dream about.... So the spirit

of romance has been to this dry, flat country; but the spirit of romance is not enough. It can see things, but it cannot persevere Coronado never did find what he was looking for, but died in the wilderness of a broken heart.[11]

コロナードは同時に又，新世界に順応しきれず，自ら死を選んだシメルダ氏の姿と重複する。経緯がどうであれ，やはり新大陸に夢をかけたであろうシメルダ氏も同様に，「失意のうちに荒野に客死した」のである。アントニーアは，コロナードによって亡き父を想起させられて，「コロナードにはそこまでする力はなかったのよ」（P.244）と悲しげに呟く。シメルダ氏には，新大陸に夢をかける豊かな想像力はあっても，それを遂行するために必要な強さが欠如していたのだ。

シメルダ氏とコロナードの相似は，夕日によって地平線上に拡大して写し出された犁の映像と対比される。コロナードと犁は，「アメリカの夢」の相補的対極点に位置する。コロナードが夢のロマンスと冒険とを象徴するならば，犁は夢の現実面である。丁度，新世界に第二の楽園を建設するためには，旧世界の伝統，教養との融合が必要であった如く，夢の実現には，物質的文明の力が不可欠であり，これを欠いたシメルダ氏の夢は，崩壊を余儀なくされたのだ。農耕器具は夢を現実化する道具であり，ロマンスの後には文明が到来する。その意味で，コロナードやシメルダ氏が精神的開拓者であるのに対し，犁は物質的開拓を象徴しているといえる[12]。シメルダ氏の精神的遺産を受け継ぐ者としてジムは，そこに遙か昔の旧世界人が抱いた夢のロマンチシズムとその崩壊を瞥見し，原野の彼方に沈む太陽にその幻影を歴々と見る思いがするとともに，その日輪のただ中に拡大された黒い犁の映像に，フロンティア・スピリットの優位を，新世界の未来への展望を感知するのである。

11) Randall, III, *op. cit.*, p. 305.
12) McFarland, *op. cit.*, p. 45参照.

斯くして，開拓移民の娘達への讃美，太陽に拡大投影された犁の映像は，ジムをヴァージル的詩の世界へと誘い，彼女達の青春の光の横溢した生命力こそ，旧世界のロマンスを新たな楽園建設にまで止揚し，ヴァージルが芸術の神を伴った「わが国（patria)」とは，「国家ではなく，地方でもなく，ヴァージル自身の小さな田舎……彼の父の農園」(P.264）であること，即ち，ジムにとっての「わが国」とは，「いと楽しき日々」を送った子供時代の，田園牧歌的ネブラスカの農場であるという啓示を受ける。

> It came over me, as it had never done before, the relation between girls like those and the poetry of Virgil. If there were no girls like them in the world, there would be no poetry. I understood that clearly, for the first time. This revelation seemed to me inestimably precious. I clung to it as if it might suddenly vanish. (p. 270)

この時ジムは，都会に対する田舎の，旧世界に対する新世界の優位を明確に認知する。この啓示は，彼が自己実現の「旅」の終りに受ける啓示――アントニーアは「豊かな生命の源」であり，「本来の自分」はネブラスカの土に根ざしていたのだという認識――に，直接的に通ずるものである。

3

以上，述べてきた如く，ジムの自己実現の「旅」は，アントニーアを代体験者として，自然と社会対人間の間に起るさまざまの試練を経験することにより，より高次の自己統合の段階へと展開するのだが，20年の歳月を経て訪れたアントニーアの果樹園は，第二の楽園のイメージを彷彿とさせる。曽て，苛酷な労働に揉まれ，結婚に失敗して失意の中にあった時もなお，「アントニーアの顔の真面目さには，新しく湧き出た力があふれ，その皮膚の色は，なお心に強いところ，燃えたつ生命があるということを現

わしていた。」（P.319）そして今,「年とって弱りこんでいる姿を見たくない」（P.328）と惧れているジムの前に現われたのは，10人の子供に恵まれ，たわわに実った果樹園に立つアントニーアであった。「ほかのものはたとえ何がなくなっていようとも，アントニーアは生命の光を失ってはいなかったんだ。」（P.336）「あたしという人間は，都会にいてはいつまでも惨めだろうと思うわ。淋しくなって死んでしまいそうよ。一つ一つの草堆，一本一本の立木を私がよく知っているところ，土地全体がなつかしい思いのするところに住んでいたいのよ。」（P.320）とアントニーアは言う。ひたすら土に取り組んできた彼女の「土に対する象徴的求愛(a symbolical courtship with the land)」[13]は，ここに結実したのである。ここに，"Old World manner and New World necessity" の融合が，曽てシメルダ氏が希求した「平和と秩序」が，自然と文明の融和が成就し，新たな楽園建設という「アメリカの夢」が達成されたのである。大自然から獲得した逞しい生命力，野性的な活力，強靱な意志と忍耐力，勇気と自己犠牲心，そして豊かな感性を持ったアントニーアは，自然の恣意と恩寵とをともに享受する中で，自然に生きる技を体得し，「大地の女神」として土を支配し，自然を統合融和した新世界の楽園を創造したのである。ここに Randall の叙述を引用したい。

> In the middle of this earthly paradise stands its Eve, the now victorious *Ántonia*. She has triumphed over adversity and over nature; she has wrestled with life and imposed an order on it, her order, just as she has imposed order on the wilderness of Nebraska by converting part of it into a fruitful farm with a garden at its center. In her double role as founder of a prosperous farm and progenitor of a thriving family she becomes the very symbol of fertility, and reminds us of Demeter or Ceres of old, the ancients' goddess of agriculture.[14]

13) Hoffman, *op. cit.*, p. 183.
14) Randall, Ⅲ, *op. cit.*, pp. 313—314.

斯くしてここに，Mircea Eliade が指摘する「大地・農耕・女性」の公式が完結し，ジムの上昇カーブとアントニーアの下降カーブは，ここで逆転する。アントニーアの中に「本能的に普遍的であり，真実であることが認められる，太古以来変らない人間の姿勢」(P.353)を感知し，「彼女はそのかみの種族の始祖のように，豊かな生命を生み出す源である」(P.353)と悟ることによって，ジムの「永遠の女性」探究の「旅」── 自己認識の「旅」は終結する。曽て少年時代に，ジムは自然の偉大さの中に融け込むような一体感を感じたことがあった。

> I was something that lay under the sun and felt it, like the pumpkins, and I did not want to be anything more. I was entirely happy. Perhaps we feel like that when we die and become a part of something entire, whether it is sun and air, or goodness and knowledge. At any rate, that is happiness; to be dissolved into something complete and great. When it comes to one, it comes as natural as sleep. (p. 18)

この時感じた，大自然に人間が融合し，そこから神秘的な力を獲得するという自然観から出発して，大地に根ざした生命力の勝利をアントニーアを通して目撃し，「本来の自分」は──ヴァージルの言う「わが国」は──子供時代の，ネブラスカの大平原の土に由来することを認知するのである。

> I had only to close my eyes to hear the rumbling of the wagons in the dark, and to be again overcome by that obliterating strangeness. The feelings of that night were so near that I could reach out and touch them with my hand. *I had the sense of coming home to myself, and of having found out what a little circle man's experience is.* For Ántonia and for me, this had been the road of Destiny; had taken us to those early accidents of fortune which predetermined for us all that we

can ever be. Now I understood that the same road was to bring us together again. Whatever we had missed, we possessed together the precious, the incommunicable past. (pp. 371-372) [Italics mine]

ブラック・ホークの町は彼を失望させた。昔馴染みの者はほとんど移転し，町の様子は変化していた。これに対して，「この道」は不変不動の象徴となる。この道が彼の「旅」の出発点でもあり，又，回帰点でもあるのだ。人間の経験とは，狭い範囲をぐるぐる廻っているものであり，馬車の車輪が一回転して円を描くように，ジムの経験も又，“a literal homecoming and completing of the circle”[15] なのだ。この点に関連して，この作品がいくつかの円環的サークルの形態によって成り立っていることは，興味深い。即ち，秋に始まり，冬，春，夏を経て再び秋に終る seasonal circle と，それに伴う vegetation myth，同じ道から出発して又，同じ道に戻る回帰のサークル，そして，‘the departure’ から ‘the initiation’ を経て ‘the return’ 迄の，自己認識の「旅」が描くサークルである。暗黒と死滅を象徴する冬は，シメルダ氏の自殺を核とする，自然の苛酷な試練の時である。だが，植物は一度枯れ果てても，春，再び生命力を得て甦える。そして夏，開拓移民の娘達の生命力の奔放な発露に象徴される如く，青春は絢爛と花開き，豊穣の秋に，「豊かな生命を生み出す源」として，アントニーアの中に結実するのである。この円環的サークルのイメージは「本来の自分」への回帰の「旅」を描出する際の，効果的手段として用いられている。

ここで，これまで述べてきたことを，再度要約すれば，ジムの人生参入の「旅」は，代体験者アントニーアに投影される社会の現実を目撃し，彼女を媒介として，無限定の自由を縦恣することのできた，自然と一致融合した黄金の子供時代を想起し，彼女の中にこそ，願望してやまなかった

15) McFarland, *op. cit.*, p. 49.

「永遠の女性」―― アニマ像が存在しているのであり，「本来の自分」は，彼女を介在として連結しているところの，子供時代のネブラスカの土にあることを認知する「旅」であったのだ。従って両者は，観察者と行為者として平行線を辿るのではなく，各々別々の道を歩みながら，一方が常に他方を希求していた――即ち，ジムはアントニーアを焦点とするサークル上を動いていたのである。換言すれば，McFarland が語っている如く，アントニーアの生涯は，生から死への水平運動のみならず，生命の根源にまで溯る垂直運動をも同時に進行させるものであるが故に，当然ジムも又，生物学的水平運動のみならず，彼女に運動の意志と目的とを付与されて，immaturity から maturity へ，innocence から experience への垂直運動をも志向するべく，運命づけられるのである。

ここで閑却してはならないことは，この物語が，東部で成功した都会人ジムの回想として語られていることである。東部に於ける成功にもかかわらず，彼の精神生活は満たされず[16]彼は常に，田舎の生活への，子供時代へのノスタルジアに駆られている。彼はこの物語を，未来への展望としてではなく，過去への追憶として語っているのであり，この点から考えると，この物語は決して，前進的，建設的な強さを描いた，国家の未来の叙事詩的ヴィジョンを示すもの云々ではなく，むしろ，「敗北の運命をその底に宿した開拓農民の夢物語であり，彼等農民の理想の空しさ」[17]を描き出したものとみなさなければならない。それが，種族の始祖として大地に生きる「偉大なる母」の理想像を描くにあたり，「作者自身は姿を消し，都会での成功者の過去への郷愁に満ちた回想形式に依存して，作者と女主人公との距離を持たざるをえなかった」[18]故以である。ここに我々は，F.Scott Fitzgerald が，『偉大なるギャッツビィー (*The Great Gatsby*)』(1925)

16) ジムの妻は，彼のロマンティックな気質，静かな趣味とは相入れないらしく，気まま勝手な生活を送り，しかもジェイムズ・バーデン夫人という名目だけは保っていくつもりらしい。

17) 元田脩一，「遙かなる反響――現代作家とフロンティア」，大橋健三郎編『フロンティアの意味――現実と神話』(南雲堂，1969)，p.319.

18) *Loc. cit.*

に於いて，ニック・キャラウエイ（Nick Carraway）をして「アメリカの夢」の終焉を確認させたこととの類似を，想起せざるをえない。アメリカの開拓民の夢の具現者は，飽くまでジムの回想の中にとどまり，曽てアメリカ国民の集合的願望であった，荒野にかけた「アメリカの夢」は，大草原の喪失とともに崩壊し，そのロマンティシズムは，「他人には伝えようもないあの貴重な過去」（P.371）の中にのみ，存在し続けるのである。それ故にこそ，作中でジムが呟くヴァージルの詩句が，一層の哀感をもって我々に迫ってくるのである。

'Optima dies....prima fugit.'

いと楽しき日々は……いち早く過ぎゆく。